

|         |  |
|---------|--|
| 氏名(本籍)  | 柴原 健太郎(京都府)  |
| 学位の種類   | 博士(体育科学)   |
| 学位記番号   | 甲第69号  |
| 学位授与年月日 | 平成29年3月10日   |
| 学位授与の要件 | 日本体育大学学位規程第5条の学位は、大学院学則第29条の規定により、<br>大学院研究科博士後期課程(博士課程)を修了した者に授与する。 |
| 学位論文題目  | 大学男子テニス選手におけるアンフォースドエラーに関する研究  |
| 審査員     | 主査 教授 西 條 修 光<br>副査 教授 西 山 哲 成<br>副査 教授 伊 藤 雅 充                      |

### 論 文 審 査 結 果 の 要 旨

テニスの試合で勝つためには、相手選手よりもアンフォースドエラー(ラリーの主導権を握っている選手が引き起こすミスのこと、以下:UE)を少なくすることが重要といわれてきたが、その実体を検討したものは余りみられない。本博士論文はテニスにおける大学男子選手のUEの発生状況や発生原因、発生メカニズムについて検討したものである。

第2章では、ラリーについてゲーム分析によって技能レベル別(大学とフューチャーズ選手)にみたところ、大学選手の方でUEの発生が多く、両群ともに得ゲームよりも失ゲームでラリーの初期段階(3と5打目)に多かった。この結果から、今後UEを少なくするための防止策だけでなく、3、5打目でのUE発生の原因についての検討が必要なことが示唆された。第3章では、関東と関西の大学テニス連盟に加入している男子選手303名を対象に質問紙法によって、UEの発生原因と因果関係について検討した。その結果、①質問項目すべてを投入し質問項目の因子構造をみたところ、UEの原因として「錯誤」「不適切なプレー」の2因子が抽出された。②パス解析を用いて、2因子間の因果関係をみたところ、「錯誤」から「不適切なプレー」へという因果関係がみられた。③技能レベルが上がるにつれて2因子の得点が減少することが明らかとなった。これらの結果から、技能レベルによってUEの発生頻度と原因の異なっていることが考えられた。第4章ではUEの原因の1つとして「考えながらのプレー」を想定し、思考性の負荷の程度が異なる2つの課題(計算、追唱)をしながら、ボール方向の予測をするという二重課題が、プレーにどのような影響があるかを実験的に検討した。その結果、計算のような思考性の大きい負荷が加わると、難易度が高まり全身選択反応の遅延が、追唱のような思考性が小さく、難易度の低い負荷では反応時間の遅延がみられなかった。これらの結果から、ゲーム中の「考えながらのプレー」は、動作の遅延を引き起こす可能性のあることが示唆された。

以上により、本博士論文はテニスでの勝敗と関係があるにも関わらず、実体が不明であったUEについて、不十分ではあるが発生原因と因果関係を追究した独創的なものである。今後は現場での対処法(性差も含む)の検討が期待される。

## 最終試験結果の概要

本博士論文は、テニスにおける大学男子選手のアンフォースドエラー（ラリーの主導権を握っている選手が引き起こすミスのこと、以下：UE）について、以下の①から③を検討したものである。①試合でのラリーについて、ゲーム分析によって技能レベル別（大学とフューチャーズ選手）にみたところ、大学選手の方でUEの発生が多く、両群ともに得ゲームよりも失ゲームでラリーの初期段階（3と5打目）に多かった。②UEの発生原因と因果関係について検討したところ、UEの原因として「錯誤」「不適切なプレー」の2因子が抽出され、「錯誤」から「不適切なプレー」因子へという方向で因果関係がみられ、技能レベルが上がるにつれて2因子の得点が減少した。③予測の正確性と思考性の負荷の程度との関係について実験的に検討したところ、計算しながら予測をするといった思考性の大きな負荷は、追唄のような小さな負荷よりも動作の遅延を発生させていた。以上の結果から、大学テニス選手のUEの発生は技能レベルが上がるにつれて減少していくことから、技能レベルによる情報処理過程の違いがUEの発生と因果関係に影響をもたらしていること、とくにプレー中の思考は動作の遅延を引き起こす可能性のあることが結論づけられた。

審査では論文の内容について多くの質問とアドバイスがあった。とくに、③の実験方法と考察が不十分なこと、現場でのUE発生時のインタビュー等による質的研究の必要性、論文の中の字句や文章表現についても修正の必要なことなどが指摘された。口述試験では、質問への回答に大きな疑義はなかった。これら論文と口述試験から博士の学位に要求される学力はあるものと確認された。

以上により、提出された論文は博士の学位を授与するに相応しいもので、最終試験は合格と判断された。